



中山忠光潜居跡



中山忠光潜居跡遠景

中山忠光について



中山忠光肖像画(中山神社所蔵)

なかやまだみつ

中山忠光 (1845~1864) 京都生まれ

中山忠光は、公家の家に生まれ、幼少の頃より祐宮(さきのみや。後の明治天皇)の侍従となり、上流貴族の道が約束されていた。しかし、尊攘派の活動も行っていた忠光は、突如長州を拠点に、こうみょうじとう光明寺党の党首として下関戦争に参戦する。更に、京都に戻ると「てんちゅうぐみ天誅組」の首領となり挙兵、「天誅組の変」を引き起こす。しかし徐々に敗戦を重ねるようになり、再び長州へ逃れていった。

長州においては、幕府の目を逃れるため、にわた のぶゆき庭田・延行・かみはた たすき上畑・田耕などの村々を転々としている。殊に延行村での隠棲は長期にわたり、新築した家に住み、側女と仲睦まじく暮らしていた。

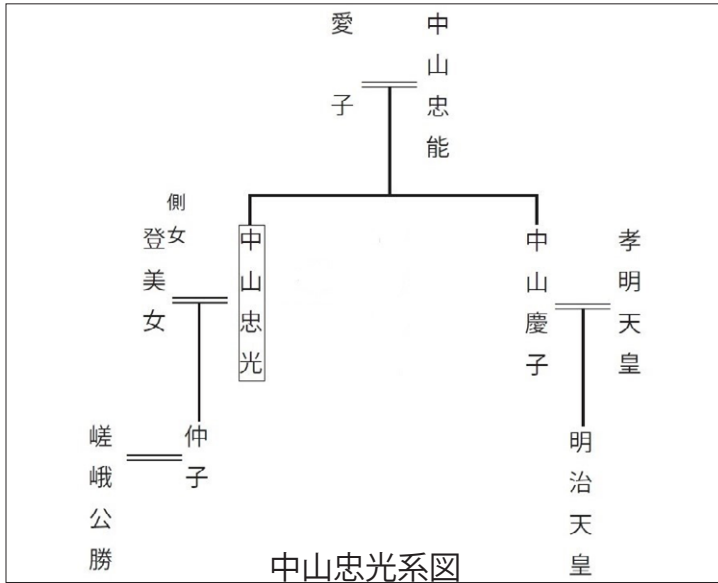
元治元(1864)年12月、田耕村の山中において暗殺される。隠れ住んだ場所は下関市内に今もその痕跡を残している。延行村には、中山忠光が使用したと伝えられる井戸があり、その地を「中山忠光潜居跡」としている。

中山忠光年譜

弘化2（1845）年 4月 1歳	京都で出生。父は尊攘派の公家忠能。母は平戸藩主松浦清の娘・愛子。姉に祐宮（後の明治天皇）の生母慶子がいる。	アメリカのマンハッタン号、浦賀に入港。通商を求める。
安政5（1858）年 1月 14歳	祐宮の侍従に任ぜられる。	吉田松陰、野山獄へ入牢。安政の大獄始まる。
文久3（1863）年 2月 19歳	国事寄人に任ぜられる。	朝廷で国事寄人が新設。
文久3（1863）年 3月 19歳	長州へ下る。	徳川家茂が上洛。
文久3（1863）年 4～5月 19歳	長州の白石正一郎宅に逗留。後に光明寺党の党首として外国船砲撃に参加する。	下関事件。
文久3（1863）年 6月 19歳	帰京する。	奇兵隊結成。
文久3（1863）年 8月 19歳	天皇の大和行幸の時を狙い、天誅組の党首として挙兵。17日、幕府領の五條代官所（大和代官所）を襲撃（天誅組の変）。	天誅組の変。 八月十八日の政変。
文久3（1863）年 9月 19歳	天誅組壊滅。忠光、長州へ敗走。	奇兵隊、三田尻へ転陣。
文久3（1863）年 10月 19歳	忠光、弥富村（現在の萩市旧須佐町）の全柳寺に滞在。	平野国臣ら、生野で挙兵。
文久3（1863）年 11月 19歳	11日に白石正一郎宅を訪問。その後、15日までの間に庭田村へ移る。	精兵隊が功山寺より撤収。功山寺に練武場を置く。
元治元（1864）年 1月～6月 ※ 20歳	4日に延行村（現在の下関市大字延行）へ移り住む。登美女を側女として迎える。	長府藩、勝山に居城を移す。 池田屋事件。
元治元（1864）年 7月 20歳	上畑村の常光庵へ移り住む。	禁門の変。
元治元（1864）年 8月 20歳	田耕村へ移り、太田新右衛門宅などに滞在する。	長州藩三家老監禁。四国艦隊下関砲撃事件。 周布政之助自刃（9月）。
元治元（1864）年 11月 20歳	長州藩士により暗殺される（諸説有）。遺体は綾羅木浜に埋葬される。	長州藩三家老切腹。 高杉晋作挙兵（12月）。

※ 2月20日より元治に改元

1. 出生と尊攘派との関わり



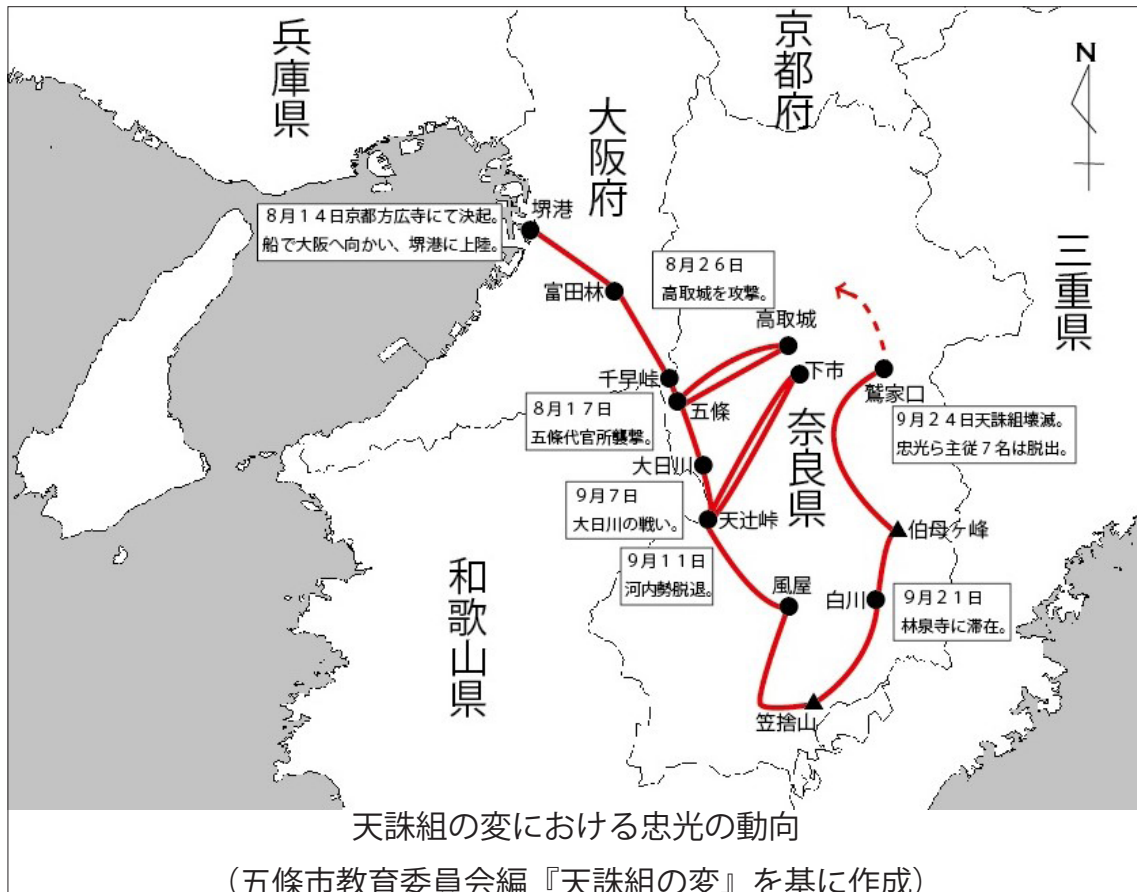
中山家は、藤原北家の花山院家の支流にあたる。忠光の父忠能は権大納言の位を持ち、攘夷急進派の公家として活動しており、忠光はその七男として出生した。姉慶子は後に明治天皇となる祐宮の母であり、忠光もその侍従となるなど、天皇家との結びつきが強かった。

父の交友関係の影響を受け、真木和泉や久坂玄瑞等、攘夷急進派の活動家との交流が活発であり、文久3（1863）年3月、長州へ下向し、外国船への砲撃などに参加した。この時玄瑞らと結成した「光明寺党」は、後に「奇兵隊」の母体となった組織である。

2. 天誅組の変

文久3（1863）年8月、攘夷急進派の建策により、天皇の大和行幸が決定する。この時を狙い、尊攘急進派が先鋒となり挙兵、忠光はその「天誅組」と呼ばれる集団の首領として参加した。8月17日、幕府領の五條代官所（大和代官所）を襲撃、代官など5名を殺害した。これを「天誅組の変」という。

その後天誅組は、五條代官所管内にある桜井寺を本陣として、翌日幕府領であった五条を朝廷領と布告、「年貢半減令」を公布した。しかし、この日は「八月十八日の政変」が起こった日であり、天皇の大和行幸が中止されただけでなく、尊攘派が京都から一掃された日であった。このことは、翌19日には天誅組に伝えられた。これを機に天誅組は徐々に勢いを失い、9月24日に壊滅。忠光は大阪へ脱出後、長州藩へ逃れることとなった。



3. 長州潜居

長州藩では、元々藩士との親交があったため、長府毛利家の預りとなり、月山（現在の華山^{げさん}）のふもとの庭田村（現在の下関市豊田町）での潜居を経て、延行村（現在の下関市大字延行）にて一軒家を新築し、文久4（1864）年1月4日より、この新居へ移り住んだ。ここでの生活は、外出すままならぬものであったと伝えられているが、一方で奇兵隊士が密かに訪れ、親交を深めるなど、人との交流がなかったわけではない。この頃長府藩は、陪臣司直紀^{ぼいしん}を「密御用掛」に任命し、忠光に随従するようにしていた。また、潜居の慰めとして、下関市赤間町で旅籠屋を経営する恩地与兵衛^{おんちよべえ}の娘登美女^{とみ}を紹介し、側女として忠光の傍に置くこととなった。

この頃長州藩は苦難の時であり、「池田屋事件」や「禁門の変」、列強4国と長州藩の間で勃発した「下関戦争」や尊攘派の中核であった周布政之助^{すふまさのすけ}の自刃、三家老の監禁（後に切腹）といった、出来事が立て続けに起こっていた。その影響を受け、忠光も延行村を離れ、同年7月には現豊北町には宇賀村上畑^{うかむらかみはた}（現在の下関市豊北町大字北宇賀上畑）の常光庵、8月には白滝山のふもと田耕村（現在の下関市豊北町大字田耕）の農家など、山間部を転々とするようになった。

元治元（1864）年11月（諸説あり）に長府藩士の手にかかり落命。遺体は綾羅木浜の砂丘に埋葬された。



中山忠光潜居跡（下関市大字延行）



常光庵（下関市豊北町大字北宇賀上畑）

4. 忠光の死後

墓は死後、奇兵隊士の手により墓標が建てられる。その後、慶応元（1865）年に現在の墓に改められた。また、同年、墳墓の上に社殿を建て、「中山社」と称した。これが現在の「中山神社」の原型となる。墓標は翌年花崗岩製の墓石に改められた。これが現在国指定の史跡である「中山忠光墓」である。中山神社はこの他、忠光の消息が途絶えた付近にも「本宮中山神社」が建立されている。この神社は、昭和30（1955）年の忠光没後百年祭を行った際に建てられたものである。

延行村において娶った登美女は忠光の子を身ごもっており、その子、仲子は最後の長州藩主毛利元徳の養子となった後、母とともに中山家に引き取られることとなり、明治期に侯爵嵯峨公勝（さがきんとう）の夫人となる。また、清国最後の皇帝、愛新覚羅溥儀^{あいしんかくらふぎ}の弟溥傑^{ふけつ}の夫人となった浩^{ひろ}は、忠光の曾孫にあたる。

かつて延行村で忠光が潜居していたと伝えられている場所には井戸が残されており、「中山忠光朝臣隠棲之地」^{なかやまただみつあそんいんせい}と刻まれた石碑が建てられている。



本宮中山神社（下関市豊北町大字田耕）



史跡中山忠光墓（下関市綾羅木本町 中山神社境内）

忠光と関わった人物

なかやま ただやす

中山 忠能（1809～1888）

忠光の父にあたる公家。岩倉具視らと共に「王政復古の大本営」を実現させるなど、討幕に大きく貢献した。晩年は、曾孫にあたる大正天皇の養育係を務めた。

くさか げんずい

久坂 玄瑞（1840～1864）

長州藩士。妻は吉田松陰の妹、文。忠光を首領とした光明寺党を結成し、外国船に砲撃を仕掛けるなどした。禁門の変において敗走し、最後は残った仲間の寺島忠三郎と刺し違え自害した。

まき いずみ

真木 和泉（1813～1864）

久留米藩士、久留米水天宮祠官。和泉は通称で、本名は保臣（やすおみ）。真木和泉守とも呼ばれた。玄瑞らとともに活動するも禁門の変において敗走し、天王山で自害した。

しらいし しょういちろう

白石 正一郎（1812～1880）

豪商。高杉晋作、西郷隆盛などの幕末に活躍した人物の援助を行った人物であり、忠光も一時期屋敷に滞在していた。また、正一郎が残した日記には、幾度か忠光についての記述がある。

さが きんとう

嵯峨 公勝（1863～1941）

幕末に活躍した正親町三条実愛（改名し嵯峨実愛）の子。侯爵。忠光の遺児仲子の夫。

中山忠光卿潜伏地



大田新右衛門宅 ●

・元治元年 8月-21日、11月 5日

四恩寺 ●●

・元治元年 9月中旬

夜討峠 ●

・元治元年 11月 8日

本宮中山神社 (田耕)

・元治元年 11月 8日

石川良平宅 ●●■

・元治元年 7月 5日

常光庵 ●

・元治元年 7月 6日

山本五兵衛宅 ●●

・元治元年 8月 7日

三惠寺 ●●●

・元治元年 8月 14日

道源孫三郎宅 ●●

・元治元年 8月 6日

観音院 ●

・元治元年 8月 18日

村田庄三郎宅 ●

・元治元年 7月 5日

延行村潜居地 ●●

・元治元年 1月 4日より約半年

中山神社 (綾羅木) ●

・元治元年 11月 9日

白石正一郎宅 ■

・文久 3年 4月 2日、8日、29日

5月 17日、11月 11日

参考文書一覧

- 白石正一郎日記中摘要
- 古谷道庵日乗
- 中山忠光書状
- 中山忠光御事蹟
- 文久三年十二月密用掛之覚
- 中山忠光卿付添国司直記調書 寫
- 中山忠光朝臣事蹟
- 中山忠光卿御事歴関係書類綴